

誘導保育成立の過程に関する一研究 ——その初期を中心として——

・ 小 林 明 子

〔目的〕

本研究は、「誘導保育」の理論誕生の過程を詳細に追いかけて、特に、指導者倉橋惣三と東京女子高等師範学校附属幼稚園（以後、付属幼稚園と記す）の実践とのかかわり合いを跡づけ、「誘導保育」が実践のための理論として形成されていく経緯を解明することを試みたものである。

わが国の幼稚園の歴史を考えると、「誘導保育」および「誘導保育案」は見逃すことのできない理論であり、その具体とされている。けれども、「誘導保育」そのものを対象化してその詳細な検討を試みた研究は少ない。総合的な倉橋研究の一部として、その解説、位置づけ、評価が行われているものが散見されるだけである。即ち、未だ「誘導保育」に関しては解明し尽くされているとは言い難い。本研究が倉橋と付属幼稚園の実践とのかかわり合いに着目したのも、それらの研究が両者の関係を指摘し、倉橋自身がその密接な関係を言明しているにもかかわらず、その点からの成立過程に関する研究が未だ試みられていないからである。

〔方法〕

本研究は、『幼児の教育』全93巻を使用し、倉橋の講演の記録、座談会、保育者の実践報告、口絵、広告、回顧録等、当時の倉橋と付属幼稚園のかかわりを知ることができる記事を中心資料とする。⁽¹⁾

なお、研究対象期間は、倉橋が主事として着任した大正6年11月から、『幼児の教育』に「誘導保育」という言葉が初出する昭和8年11月までとする。

〔考察〕

（１）理論誕生の過程

本研究では、はじめに、倉橋の「誘導という主張」の発生について、その時期を特定することを試みた。その方法としては、倉橋の「保育者の存在のありよう」への言及の変化を追った。⁽²⁾

そのための前提として、まず、倉橋の使う「生活」という言葉の意味を明らかにした。倉橋の言う「生活」とは、必然性に促された「自発的な目的」を持つものであり、相互性・社会性に基づくものである。⁽³⁾

倉橋の「誘導という主張」とは、子供を誘導するに

は保育者が「先ず自ら生活していること」が必要であり、「その生き生きとした生活態度が、子供を大人の生活へ引き入れる」というものである。それは、昭和3年にその萌芽が見られ、昭和5年に発生した。⁽⁴⁾

ところで、「誘導という主張」の発生直前の昭和3、4、5年の付属幼稚園では、すでに、保育者の誘導による実践が行われていた。この実践は、自発性を尊重する指導者倉橋に傾倒する保育者の、子供の自発を求めた実践であった。けれども、それは予測とは異なる展開をみせた。即ち、子供の自発を求めた保育者が、思わず子供の活動を引っ張ってしまったのである。⁽⁵⁾ 倉橋は、その実践を批判、否定する事なく、逆に受け止め、理論化していった。これが、倉橋の誘導保育理論誕生の過程であった。

（２）「生活する保育者」の誕生

一方、これらの実践が行われた昭和3、4、5年の実践報告に共通する特徴から、この時期は、付属幼稚園の製作の質が作り方から作ることへ変化し、「製作が生活的になった時期」であり、子供たちが生活的になった時期である、ということができる。⁽⁶⁾

子供が「生活的である」ためには、まず、「子供以前に保育者自身が生活者であること」が必要である。保育者自身の生活によって子供を誘導すること、これが倉橋の主張であり、保育者に求めた基本であった。

このことから、保育者は昭和3、4、5年までに「生活的」になっていた、つまり、「生活する保育者＝誘導する保育者」が誕生していたと考えられる。

ところで、この生活する保育者は、「生活する指導者」倉橋の自ずからなる誘導によって生まれた。その一例として、倉橋の人形芝居上演を挙げることができる。倉橋は伸びやかに生きる一人の人として、自分の趣味の人形芝居を自分の生活の場である付属幼稚園で上演した。そして、回りの者をもその準備に巻き込んでしまった。⁽⁷⁾

このように、指導者としての倉橋が、自ずから自分らしさを発揮して伸びやかに生活することで回りにいる者も活力を与えられ、生き生きとした生活を展開し始める。即ち、真の生活者は、意図することなく周囲を巻き込んで他をも生活者にすることができるということを、身をもって実践したということができよう。

(3) 「生活する指導者」倉橋と保育者の関係

このように、誘導保育誕生の過程の始まりには、まず、指導者である倉橋の自ずからなる保育者への誘導があり、それによって生活者となった保育者の自ずからなる子供への誘導が実現した。

そして、倉橋は保育者が生活者になった後は、それぞれにふさわしい言葉かけ、励ましを行っている。保育者は、その倉橋の言葉によって継続意欲を刺激され、より一層の高揚感と充実感を持って活動を進めた。⁽⁸⁾それらは、保育者個人々人への充実指導的助言である。

このように、倉橋の子供に対する保育理論は、同時に、保育者たちへの指導理論でもあった。

[まとめ]

以上、倉橋の「誘導保育論」が、付属幼稚園の実践に導かれつつ形を整えていく経緯を明らかにした。それは、換言すれば、「子供を生き生きと生活させる」という倉橋の言葉による主張を保育者が自身の身体で実行しようと試み、その保育者の身体的実践に対して、倉橋が再び言葉をかける、という経緯であった。

そこで、この言葉をかけるということが、倉橋と保育者の関係にどのような意味を持ち得たかについてまとめてみたい。

倉橋は、実に多くの講演会、講習会において不特定多数の受講者を相手に言葉を駆使して自分の考えを述べてきた。けれども、付属幼稚園の中で共に生活している保育者の前でその理論を語ったことはなかったという。

先にみたように、まず、生活する指導者倉橋の自ずからなる誘導によって、保育者も生き生きした生活を展開し始める。この段階では言葉の果たす役割は多くはない。しかし、次の段階、保育者が倉橋に誘われて活動を開始したときに、それぞれにふさわしい言葉がかけられ、保育者は励まされる。実践者である保育者は、ときには、それほど明確な目的意識もないままにある活動に着手してしまうこともあったに違いない。そんなとき、倉橋の的確な言葉かけや励ましが保育者を勇気づける。彼女たちは、今試みつつあるこの活動が子供たちの活動を誘導し、より大きな活動へとまとめ上げていく過程なのだとなんて思えてきて、自信を持つことができた。最初に自身の態度で誘導した倉橋は、次いで保育者たちが生き生きと活動を開始した後は、それを個々の保育者の自己活動と受け止めて、さながらに充実指導的助言を行った。その言葉によって、個々の保育者たちはより充実した方向へと一歩を進めるこ

とが可能となったと考えられる。そういう倉橋と保育者の関係のありようこそが、やがて提唱される倉橋の理論の具現化した姿だった。

[註]

(1) 倉橋と実践とのかかわりを語る資料として、従来、主に、当時の保育者のインタビューや回顧談が用いられてきた。それらの多くは完成され普及された理論を踏まえて当時を語っている。本研究では、その当時記された実践報告等を詳細に検討し、それと同時進行形で変わって行く倉橋の言説を追うことで、理論形成にかかわる実践の役割がより鮮明になる、と考える。

(2) それは、変遷の後、昭和9年には、「保母の位置は子供より以前にあり、先ず自ら生活しているのでなければならない」(『幼稚園保育法真諦』p. 122) となった。

(3) 「生活か教育か」(第19巻12号, T8), 「個人性格と社会性格」(第23巻2号, T12), 「自発活動と目的活動(一),(二),(三)」(第24巻2, 3, 4号, T13)

倉橋が、「自発活動と目的活動(三)」の中で、強調しているのは、自発的な目的を持つ者の生活動力のある「真の生活」である。彼は、外来思想として導入されたプロジェクトメソッドが、その本来的な主張と原則(動力のある組織だった生活)から生活過程の訓練(単に組織だった生活)に偏ってしまっている、として危惧と批判を抱いている(pp. 106, 107)。

(4) 「生活か教育か」(第19巻12号, T8), 「幼児の心理と教育」(S3), 「短信(三)」(第30巻5号, S5)

倉橋の考える「保育者の在り方」の変遷は、「子供の生活に参加する」(T8)から、子供の生活の傍らで「大人自身の生活をする」(S3)を経て、子供をその生活へ引き入れて来るために「先ず自分の生活をしている」(S5)である。一方、それと不可分に彼の誘導観「子供を引き入れる力は保育者の生活態度にある」(S5)が発生している。

(5) 及川ふみ「連続的作業を中心としての手技」(第28巻11号), 新庄よしこ「幼児の仕事の一つ」(第28巻10号), 菊池ふじの「幼稚園四十年(三)」(第65巻12号)

(6) その特徴は、連続する、製作であり、報告には11絵が付されているの3つである。

(7) 及川ふみ「新しい保育の胎動期」(第62巻10号)p. 4, 倉橋惣三 序 (菊池ふじの・徳久孝『幼児のための人形芝居の脚本』フレーベル館 S5) p. 2

(8) 新庄よしこ「思ひ出のまゝに」(第32巻12号)p. 36, 「幼児の仕事の一つ」(第28巻10号)p. 65, 菊池ふじの「幼稚園四十年(六)」(第66巻6号)pp. 52~59

* 『幼児の教育』の記事は巻・号のみを記した